

# 議 事 録

令和4年9月5日作成

会 議 の 名 称	令和4年度第1回島本町総合教育会議		
会 議 の 開 催 日 時	令和4年8月19日（金）10時00分～11時00分		
会 議 の 開 催 場 所	島本町役場3階 委員会室	公開の可否	可
事務局（担当課）	総合政策部 政策企画課	傍聴者数	4名
非公開の理由（非公開（会議の一部非公開を含む。）の場合）	—		
出 席 委 員	議 長 山田町長 教育委員会 中村教育長、高岡委員、森田委員、西尾委員、丸野委員		
会 議 の 議 題	案件1 令和5年度教育特例校の廃止及び授業時数特例校の新規指定について 案件2 その他		
配 布 資 料	資料1 令和5年度教育特例校の廃止及び授業時数特例校の新規指定について		
審 議 の 内 容	別紙のとおり		

## 開会

- 開催のあいさつ
- 傍聴の許可

### 【案件1】みづまるキッズプランの進捗状況について

議 長

それでは、案件に従いまして、議事を進めさせていただきます。  
まずは、案件1、令和5年度教育特例校の廃止及び授業時数特例校の新規指定についてでございます。  
まずは、配布資料1をもとに、教育長から概要を説明願います。

教 育 長

**（資料1「令和5年度教育特例校の廃止及び授業時数特例校の新規指定について」の説明）**

議 長

ただいま令和5年度の教育特例校の廃止及び授業時数特例校の新規指定について教育長から説明がございましたけれども、教育委員の皆様からご意見、ご質問等ございましたらよろしくお願ひいたします。

委 員

2ページ目にある2番のところなんですけども、授業時数特例校の活用で総枠は維持というふうに1番で述べられているんですけども、2番の小学校のところ、年間合計が1学年だと14減で第2学年だと15減されていて、こちらは何かで補填されるのか、どういう理由があるのか、教えていただければと思います。

教育委員会事務局

年間合計14減15減のところでございますが、これにつきましては、1枚目の方のイメージ1のところをご覧いただければと思うんですけども、令和2年度につきましては英語、外国語活動を14時間15時間を上積みしておりますので、この上積みから戻すということで、元になるものをトータルしますと、標準時数になるんですけども2ページの2番の注釈でもありますように、標準総合授業時数は1学年で850時間で、2年生では910時間トータルしますと、ここに標準に合うという形になりますので、あくまでも特例校からの減ということになります。

委 員

ということは、英語の特例校ですと、英語の時間を長くすることができていたということでしょうか。

教育委員会事務局

はい、委員おっしゃるとおりでございます。

委 員

現実こういう総合の教育が増えるとか、生活科でいわば自分たちでカリキュラム化していかないといけないということになると、疲弊が激しいと言われる現場の先生の中で、どれだけの対応が可能なのか、また先生方の意欲がどれぐらいあるのか。

現場で議論もされているということですので、そのあたりを教えていただければなと思います。

教 育 長

おっしゃるとおりで、とても負担感を感じられる教職員もいるかもしれませんが、今後必要になってくるのは、教科を横断する視点、そして目の前の子どもを見てそして学校教育目標を見ながら、授業をデザインしていく力は要求されると思うんです。

そのためにこの3年間は保育所連携に主軸を置いてるんですが、それだけ

では駄目であろうと、どうしてもカリキュラムマネジメントの視点が、必要になってくる。

そして、そのカリキュラムマネジメントをする意義ですとか、意味を教職員がわからないと、やらされ感だけではもったいないので、そういう意味もあって本年度カリキュラムマネジメントの全体の研修も行っておりますし、秋には管理職を対象としたカリキュラムマネジメントの研修を行います。

それに先立ちまして、学校の中でカリキュラムマネジメントのことは、以前からも少しずつは校長先生たちにお話していただきましたので、学校の校内研修として取り組んでいるところもありました。

実際その研修の内容を拝見しに行ったんですが、全部の教科書を持ち寄って、各学年ごとにどの教科であれば、クロスすることができるだろうか。

ちょっと教科間でつなげたり、そして、そのつなげる話の過程の中で新しい企画を思いついたりと遊び感覚で、先生方が心からその時間を楽しんでいるように見えたんですね。

知の総合化ということが言われるんですが、それを子どもたちも体感して、変わっていくためには大人がその意味をわかって、大人自身が楽しんでいないと駄目なので、教職員の研修を拝見したときに、負担感とかやらされ感というのは全くなくて、嬉々として、その研修に取り組んでいる姿が見られたんです。ですから、パラダイムシフトだと思うんですね。

そういう発想は、いくら学習指導要領で4つの柱として提案されているとは言え、大きく変わることですから、そのパラダイムシフトの最初のイメージからすると、ドミノをイメージして最初の一步がポツンと倒れたら、だだっど倒れていくことも期待したいなと思っています。

私が拝見した研修でいいなと思ったのは、その会場の全面に学校教育目標がどんと掲示されていて、先生たちはこんなんどうだろうというときに、絶えずそことリンクさせながら研修を行っていたのがとても印象的だったんです。

今まで私自身も反省なんですが、学校教育目標というのは学校長が、これでいくよって提示するリーダーシップも大切なんですけれども、どんな先生が学校教育目標を言えるんだろうって思ったことがあって、学校教育目標も教職員とともに作っていくという姿勢を管理職が示すことによって、その授業を何故行うのかっていうことが、こういう子どもに育てたいから、こういう学校を作りたいからっていうところに、理想論かもしれないんですけどリンクしていけばいいなというふうに思っています。

主体的、対話的な深い学びというふうに言われますが、それは、1単位時間の中で必ずしも完結するものではなくて、単元や内容は時間のまとまりをどんなふうに構成するかというデザインを考えることで実現すると思います。

ですからプロジェクト型学習っていうのも有効だと思いますし、1問1答ではなくて、問いと答えでその間ができるだけ長いようなその学習構成も、生み出されるようになればいいなと思っています。

しかもその答えは一つに定まらないような横断的に取り組んでいく中でも、教科教育は絶対大切だし、教科固有の知識も大切だと思うので、そういうデザインされた学習と教科教育がどんなふうにつながっていくのかということも絶えず意識されていかないといけないなと思っています。

委員

2点質問させてください。平成18年度から英語についての強化をされていたということで上積みの14時間、15時間の成果として、英検3級相当以上の生徒が多いということにつながっていると思います。今回、教育転換になると思いますが、小学校中学校で6年間教育されていた先生方でどういう意見があったのかお聞かせいただきたいのが1点。

それと2ページ目の1番下のところの小学校では20時間削減し、新たに20時間生活科に充てる。中学校では35時間の根拠を教えてください。

おそらく20時間は外国語活動に充てていたものだと思いますが、生活科に必要な時間は違うと思うのでその根拠を教えてください。

教育委員会事務局

まず1点目のご質問でございますが、平成18年度から国の制度を活用してまいりまして、当初は小学校に英語教育はございませんでしたので、新設するという形で、特例校を始めました。

令和2年度からの小学校の学習指導要領ではもう3年生から外国語活動が入りまして、5年生6年生は英語科ということで小学校に英語が根付いてきました。

なので、1年生2年生に限って今本町では、この特例校制度を活用してるわけでございますが、そういったことも踏まえまして一定の成果を上げているということで、英語を後退させるということではなくて、今求められている島本町の子どもたちの実態も合わせて、いわゆる見えない学力を育てたいという思いですので、現場からは異論はありませんでした。

逆に時間が限られますので、このみづまるキッズプランに力を注ぐべきだというふうに聞いております。

2点目のこの時間数の根拠でございますが、まずこの中学校の35時間というのは、週1時間が根拠でございます。

ただ特例校に関しましては、上積みをするので、14時間15時間というのが上積みとなると、そこから差し引き20時間ということで、英語については生活から20時間をとって、さらに14時間上積みして34時間35時間という形をとっております。

それが一つの根拠でございます。

みづまるキッズプランでの20時間の根拠でございますが、これにつきましては、一定授業時数特例校制度に関しましては、一つの教科について、1割程度が上限でございます。

1割となりますと生活科で言うと30時間弱になるんですけども、生活科がまず外国語活動から20時間戻ってきますので、現場からして見ると40時間が増えるということになりますので、今まで82時間やっていたところを40時間足すわけですから、それだけで1.5倍なりますので、その負担も考えますと、20時間が妥当かなということで20時間とさせてもらっています。

委員

まず全体の流れとして今の新しくなった指導要領の方針に合致した改革になっていると思うんですね。

そういう意味で大枠について非常にいいなというふうに思っております。今回小学校の低学年の授業時数がクローズアップされているんですけども、みづまるキッズプランは保・幼・小の連携の部分ですので、この改革は小学校からの改革ではなくて就学前のところまで改革の足を伸ばそうとしているというのが非常に大きなところなのかなと思うんですね。

教育特例校制度で外国語教育をとるところは小学校からスタートするわけなんですけども、先ほどおっしゃったように、中学年から外国語活動が新設されて、ある程度役割を終えたということであれば、次はいよいよ就学前の子どもたちのところから学びに向かう力であったり、あるいは人間性を育てていくことが今回指導要領でもうたわれていますし、今回の指導要領は幼稚園から高校段階までで総合・支援学校も含めてその力を育てるんだということで全体が足並みをそろえて改革されているものですので、それに正しく合致していると思います。

今まで外国語活動を先んじて行って、それが功を奏して非常に高い力

を持っていた部分ですけれども、それについては教育長おっしゃったようにカリキュラムマネジメントができる枠が広がったということで捉えていくと、その中に実際に例えば英語を使う場面をたくさん入れるんだとか、あるいは英語ということと言語運用能力だけではなくて多文化共生異文化理解の方にも子どもたちの目が向くようになっていけば、目に見えにくい力だけれども、より大きな力はあるというのかなというふうには感じました。

ただ一方、逆にそのカリキュラムマネジメントの枠が増えるということは、目先の狭い力にとらわれて、注力していくようなスタイルになっていくと、そこで子どもたちが自ら学んでいこうとする力を削いでしまうことになるので、その部分をいかに先生方と子どもたちが自分たちで共に学んでいこうとするような学習活動をいかに先生方が展開していくことができるのかというのが問われていくような、そんな改革になるのかなというふうに思いました。

大きな成果を得られると思うんですけども、その分先生方の力量が問われているのかなというふうに感じております。

## 教 育 長

今回は保・幼・小から、ずっと上に向かっていってというイメージがあるんですが、この1年少しですけれども、保育所幼稚園の現場を見る機会をたくさんいただいて思ったのは、子どもは0歳から考えていて、元々探求する欲求というのは生まれながらに持っているなど。

就学前の子どもたちはそれを裏付けるような姿をいかに発揮していて、日々の保育、幼稚園教育の中で自分の課題を見つけては、飽きることなく解決のために何度も何度も納得いくまで試行錯誤を繰り返していて、保育士さんや先生方はそれを上手にすくって次の活動へと発展させておられるんですね。

そういうことが、小学校の職員は、ちゃんとわかっていないのではないかな。だからそこから学ぶことは大変大きいと思ったんです。

入学してしまうと遊びとか学びへの要求自体が弱まっていくような感じを受けるのはなぜだろうかというのは、問題を解決する前に既に解決されていたり、意欲がわくような環境が用意されていなかったりということもあるのかもしれない。

昨年度からの、保育所幼稚園の職員と小学校と共同で教育保育の中身について話し合う場を持った意味は、非常に大きいと思っています。

私もですが、就学前の方々から指摘されたことで、今までの学校文化の中で培われた価値観や既存の方法がガラッと崩れたり、はっと気づかされたりすることがとても多かったのも、今までの委員がおっしゃった、共に学ぶ意欲を持つという姿勢を作るためのヒントは、就学前にとってもたくさんあるし、本当の意味で、小学校以降の職員がそれを理解してリスペクトすることが、一番なのかなと思っています。

英語に関してはカリキュラムマネジメントの中で、そういう必然性、英語を使う場面を作っていくっていう、大変貴重な意見をいただいたと思いますが、一方でその意味や意義を理解しないままにやれと言われていたりしているというのでは本末転倒でございます。

先ほど申し上げたように、校内研修を見る限り、自分の感触からすると、先生たちが遊び感覚で取り組んでおられるようなところもあり、自分の個性とか自分の興味関心が生かされていると思います。

ただ、繰り返しますが教科教育も絶対大事ですし、教科書というだけあって大変よく考えて作られていると思うので、教科書をどう活用するのかというところにまで目を向けていけたらと思っています。

## 委 員

すごく大きな転換ですので自分の質問もうまくまとまらないですけど、

みづまるキッズプランは前から説明をいただいて、リズム的な考え方で教育を進めて、コミュニケーション能力も増やしていく。

英語のALTが減ったとしても、コミュニケーション能力を鍛えることで、英語ができてコミュニケーションができるわけじゃないですから、その基礎になるものが、ここで作られないといけないということになります。

一方で確かな学力ということがずっとうたわれて、その確かな学力を一体何で見るのかということが非常に難問です。

みづまるキッズプランで今後推し進めていくときに、その確かな人間性であるとか、確かな教育の成果であるとか、見えない学力を今度は形式数値として表していかないといけないということになると思いますので、そこが課題になっていくのかなという気がします。

## 教 育 長

正しく課題はそこだと思うんですね。

効果検証の在り方を今後、検討していかないといけないというふうに思っています。

確かな学力とは何かと言われて、自信を持って答えられるような教職員になるための取組でもあると思います。

これを進めることで必然的に人が学ぶってどういうことなのか、人間が学ぶってどういうことかとか、生きた学力ってどういうことかっていう話になってきます。

始まりの研修ではそういう声が先生方からも上がっていたし、楽しいからいいっていうのではなくて、これで何が育つのか、こんな力を育てたいよね、それは学校教育目標のこことリンクするよねっていうような話が自然に出てきていたので、そういうことが広まって、確かな学力って何かを根本的に考えないといけないかなと、そういう機会にもなればいいかなと思っています。

何を拠り所に学びを作るのか。

子どもの参加ではなくて、参画するために、それを可能にするためには、教師、大人の学びについての捉え方を見直して、子どもたちにどのような力をつけるべきなのか今一度根本的に考える機会にもなればいいかなという思っています。

本当に目になかなか見えにくいんですが、そこを何とか理解、他の方々に理解していただいたりするにはどうしたらいいのかということは、考え続けていかなければならないと思うので、また今後ともご意見をいただけるとありがたいです。

## 委 員

やっぱり教科を横断的に学ぶってとても大事なことで、国語は国語、算数は算数ということではなくて、国語と算数がどのようにつながるのかっていうところの学びが、子どもの学びに大きくなるんだろうなと、そこを目指しておられるんだろうと思います。

生活科を2時間枠続きではなくて、生活科は1時間だけどその後に社会科を入れていて、生活科と社会科が繋がるとかっていうようなイメージとか、いろいろできそうな気がします。

20時間だけは増えるんだけど、カリキュラムを組んでいく中でいろいろな可能性があり、意図的なカリキュラムを組むってということも考えられるのかなと思いました。

先ほどの評価のところであれば、私自身も評価をしなければならないところでして、見えない学力をどうやって評価するのかというのは大変なことなんですけど、今の大学生から学ぶことがこんなに面白いと思わなかったっていう言葉を聞いたときによしと思います。

だから自分で学ぼうっていう気になって、その後力がどんどんついていく

のがやっぱり目に見えてくる。

その見えない力が目に見えたときに成果があるのかなというふうに感触しているので、子ども自身が学びたいとか、学ぶことが楽しいとか、そういうふうになるきっかけ作りを学校がされるのかなと思っているので、そういうきっかけを何か作れたらいいのかなというふうに思っています。

あと、初年次教育っていうのがありまして、高校から大学に入るときに大きなギャップがあるんです。

それはいつでも同じで、幼稚園、保育所から小学校に上がると、大きなギャップが子どもにはあって、今まで遊んでいたものが机の前に座らないといけないう時間が増えたりとか、環境的に大きなギャップだと思うんです。

それによって不登校になったりっていうことがあるんですが、同じように高校から大学に上がっても、高校の時間数と大学の時間数は大きく違いますし、これだけ自分で勉強しないといけない時間が増えるっていうことに戸惑いがあったりして、不登校だけじゃなくて休校してしまったりっていうようなことがあります。

初年次教育というのはとても大事に考えているところなので、ここでいう保・幼・小連携の小学校1年生のときに、学校とその前の保・幼をうまく繋ぐきっかけになればいいと期待しています。

## 教 育 長

委員のおっしゃる初年次教育というのはまさしくそのとおりです。

保育所幼稚園から上がってきた子どもにとっては、机と椅子、そして45分間座っているっていう必然性がわからないで、小学校とはこういうものだというふうに私も言った覚えがあるのですが、言い方は悪いですが子どもにとっては知ったことではないと。

それと国語算数と評価が分けられていることも大人の都合なので、子どもにとっては必然性がなくて、全体のものだったのが分かれ始めます。

なぜ分かれるのか、あることに集中していたら、チャイムが鳴って次国語と。なぜ国語なのか。

ぱっとそういうものだと切り替えられる子はいいんだけどなかなかそうじゃないお子さんもいらっしゃいます。

委員のおっしゃる不登校等もそこに関わってくるのかなと思います。

不登校であったり支援教育であったり、そういうことへの貢献ができたらいいなというふうに思っています。

保育所に行って、年長の5歳児さんがものすごく面白い発想をして、生き生きしているお子さんがいたので、どういう子ですかと聞くと所長が小学校に上がると、支援教育の対象で集団の中で一斉の授業が受けにくい子です、とおっしゃられました。

そうしたものすごく面白いものやいいものを持っている子たちが、伸び伸びと生かされる場を作る可能性も秘めているものだというふうに思っています。

単元構成に関しては、柔軟的に組めるようになればいいと思います。

2時間続きだから2時間と切るのではなく、生活科という科目は国語や音楽や図工の要素も入っても可能な科目だと思います。

例えば、2年生の国語で比喩絵本があるんですが、国語科でゼリーのようなクラゲとか、水中ブルドーザーみたいなイセエビとか、比喩を教えて子どもたちは比喩ということ学ぶんですが、生活科で教室を一つの海に見立てて、いろんな素材を使ってそこで何々みたいな何々っていうのを子どもたちなりに作って、最終的にはオペレッタに持っていくこともできます。

それと国語科の20時間を減らすんですけども、言葉が辞書の意味だけじゃなくって、身体感覚も五感も全部伴ったものとして、言葉を使う場ができ

ているんで、それを豊かな言葉を獲得した子どもというふうに思っているんですが、五感を伴って言葉を理解し使える子どもたちに育ててくれたらなと思います。

だから国語科から生活科に20時間持っていく意味っていうのも、国語科ってすごく大事な教科、そこを20時間減らすって大丈夫なのかという意見もございましたが、そこは柔軟にカバーできるのかなと思っています。

言語能力を育てるために、またコミュニケーション能力を育てるために、国語科だけじゃなくて生活科でも、目指せるかなと思っています。

委員

小学校ではないんですけども、例えば金融という授業をやらないといけなくなって、社会科でやるとなったとき、社会科の経済を学んだ者が作るんですね。

そうすると、他の社会科は理解ができないままやらないといけない。

ましてや担任が総合の時間の中でやろうとなっても、わからないと上辺だけになってしまうとか、そういう現実が実際にあるんですね。

それを解消しようと思うと、先生方が勉強する研修する時間がどれだけ取れるか、意欲があったとしても人をどれだけ手当できるかとか、そのためにはお金がどれだけ手当がされるのかとかが必要になって、成功させようと思うとそういう予算から切り離せないと思います。その辺りはどういうふうになるのでしょうか。

教育委員会事務局

事業見直しに伴う予算に関するご指摘をいただきました。

現在、予算が増える要因として考えておりますのは、今回小学校で生活科の授業数を20時間増やして、その中でみづまるキッズプランのアプローチカリキュラムを試行実施しまして、各遊びを用いた体験的な事業作りというものを行ってまいりたいと考えており、それに要する費用というのは、発生するものと考えております。

ただその一方で、事業見直しの中で英語特例校の関係で中学校におきましては英語の授業支援講師というものを、町独自で各校1名合わせて2名配置しております、この英語支援講師の件費が大体年間450万円ございますので、今回見直しによって来年度以降、英語支援講師を廃止する方向で考えております。

ですので、事業見直しに伴って新たに発生する予算も別の一方で浮いた予算をもって充てることで、まかなえるものというふうに考えております。

いずれにいたしましても、当然予算あつての事業になりますので、教育委員会といたしましては、現計の特例校の関連事業予算を超えない範囲内で、令和5年度以降においても十分予算面にも留意して実施してまいりたいという考えでおります。

委員

先ほどの英語の教員の話なんですけど、ネイティブってとても大事で、私がしゃべっている音ではなくて、その教員がしゃべっている音を聞くだけでも、ダブリューを発音しないと、今頃になってそうなんやと思うこともあつてとても大切だと思っています。

島本町ってアメリカの姉妹都市で学校同士何かされていたと思いますが、今どうなっているんですかね。コロナなのでこの3年は難しいかもしれませんが、今はネットもつながっていますし、せっかく姉妹都市提携しているのに、消えた感じがするんですが、どうなっているんでしょうか。そういうのも生かせばいいのになと思います。

事務局

島本町は、フランクフォート市と姉妹都市提携を結んでおり、当初はあちらの方から来られたりと交流はしていたんですが、ネットでの交流も可能で

すけど、時差がありますので、時間が合わないっていうのが実情でして、コロナ禍のこの状況もあって、交流っていうのができてないというのが現状です。

ただ、単なるビデオメッセージのやりとりとか、そういうことでもやってはいけるとは思うんですけど、実際に行くとなると相当な費用もかかりますし、その辺どうしていくかということについては、引き続き検討はしていきたいと思っています。

また、フランクフォート市以外に以前から各学校で、外国の方と交流を深めるような、SNSなどインターネットを通じて交流をするというような取り組みもしていますので、並行して今後もやっていく必要があると思っています。

議 長

英語の時間数を減らして生活科の方は増えるということで、大きな転換になっていくかなと思っています。

私自身も元々、子どもたちの生きる力、見えない学力みたいなところを伸ばしていくべきだっていうことは、前からもここで申し上げておりました。

今回そういうところに向けてということなので、大いに私も賛成しているものであります。

ただ、効果検証の部分がなかなか見えないということ、過去にもここでお話したかと思えます。

昔検証された方で、10年、20年子どもたちの将来を追うアンケート調査等の結果を見ると、やはり過去に見えない学力をしっかりとつけておられた子どもたちのグループは、将来的に例えば持ち家率が高いとか、車を持っている率が高いとか、定職についている率が高いとか、そういったことは一定過去に検証されていることがあるので、私はここに尽力することが将来の子どもたちの幸せにつながるんじゃないかなというふうに、確信しているところではあります。

それが子どもたちの幸せになるのかと言われるとわからない部分もありますけれども、やはり見えない学力をしっかりと育てていくっていうことが、将来、子どもたちの学ぶ力、学ぶのが楽しいなって思ってもらえるようになってもらうのが一番かなと思います。

自分で学びたい、まだまだ楽しいと思ったら、確実にその子たちのいわゆる学力面も伸びていきますし、そういったところにつながっていくのは確実かなと思っていますので、今回大きく舵を切ることによって、地元の子どもたちが将来いろんな面で幸せになってくれたらいいなと思っていますし、そこへ向けて何とか皆さんと一緒に力を合わせてやっていきたいというふうに思っております。

おおむね皆さんからも、前向きなご意見が出たのかなというふうに思っております。

これからいろいろな課題が出てくるかとは思いますが、その都度皆さんと議論しながら、議会の皆さんにもご理解、ご協力をいただきながらやっていきたいというふうに思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

## 【案件2】その他

議 長

「案件2 その他」について、委員の皆さまから、その他にご意見、ご質問等、何かございますでしょうか。

(特になし)

議 長

事務局から何かありますでしょうか。

事 務 局

特にございません。

議 長

本日の案件は、全て終了いたしました。  
以上をもちまして、本日の会議を閉会いたします。  
お疲れさまでした。

**<終了>**